エドウィン・ミュア著『自叙伝』（4）

横山　竹己訳*

An Autobiography by Edwin Muir

Takemi YOKOYAMA*

第　二　章　　ガース

父親は地主の地代の強制取り立てにより、ブーの農場から、次にヒーリーの農場から追い出された。ブーの農場はよい農場だったが、ヒーリーの農場はよくなかった。農場を求めて一番大きな島のメインランドに行っている間に、父親は、カークウォールから三マイル郊外にあるガースと呼ばれるおよそ百エーカーの農場を賃借することを決めた。そこに移って行ったのは私が八歳のときだった。そこでは最初から何もかもがうまくいかなかった。土地は痩せていて、絶えず排水をしなければならなかったし、住まいはじめじめしていたし、雨天のときは、寝室の敷石の間で虫が身をくねらせていた。母親はいつもどこか具合が悪かった。兄や姉たちは次々とカークウォールやグラスゴーやエディンバラで職を得るために家を出て行った。家族は徐々にばらばらになっていった。馬や牛も死んでいった。父親も次第に意気消沈し、心臓を悪くし、仕事を続けることができなくなっていた。我々はみなこの荒涼とした場所が好きになれなかったし、ここでは絶えず辛い仕事に戻っていかなければならなかった。我々はガースに五年いたが、五年目が終わる頃、家に残っていたのは、父親、母親、姉のクララ、それに私とマギー叔母とサザランドだけであった。

この五年間の記憶は漠然としていて、はっきりしない。というのは、私は辛い思いをしていたし、父親も母親も同じだと思っていたからだ。よい農場とよくない農場を交換するというのは災難である。私は最初の明瞭な世界像を失ってしまい、子どもが必死になって大人の目で物事を見ようとし、また大人ぶることによって大人になりたいと思う段階に達していた。ブーでは大人とは別の平穏な生活をしていたが、今は、直ちに大人らしくなる必要性を感じていた。しかし、このことは大人になりつつある少年にとっては大きな苦しみであり、それはまるで時間が突然自分の中で声を出して語り出したかのようであった。このように切羽詰った状態では、自分自身の目で物事を見ることはできなかった。代わりに父親や母親やサザランドが見ていると思われる見方をしようとした。両親、先生、来客、他の少年たちがみんな歪曲を期待しているのを知っていたので、私も熱心に物事を歪曲した。両親をはじめ、こうした人たちも私がしていたことを熱心にしていたのだ。これはおそらく子どもが大人の世界で生きる術を身につける唯一の方法である。大人の世界というのは、信仰や想像力をもっている人以外のすべての人々にとっては、名前と数字でできている味も素っ気もない伝説である。再び自分自身の目で物をみるようになったのは、すっかり大人に成長し、大人ぶる必要がなくなってからであり、また事実を知って喜んだり驚いたりする必要がなくなってからである。我々が大人になると、もって生まれたものと思いつつ、いとも簡単に身につけてしまう仮面を、世の中のすべての人々の承認を得て、少しずつ作り上げていくのは十一歳から十八歳の時期である。もっともそれは、何をやっているのかわからない年頃に自分自身の不器用な手で顔らしくみえるように作った顔でしかない、言い換えれば、我々の想像力の中にしか存在しない大人の姿のロマンチックな概念の粗末な模倣でしかないのだが。我々は、実際、大人ぶることによって大人になっていくのである。

ワイア島で知った丘や島々をガースから見ることはできなかった。木の生えていない丘の中腹にあった家からは、大きくて半円形の入り江のインガネス湾を見下ろすことができた。そして、インガネス湾の向こうでは、常に一直線に広がっている大西洋がゆらゆらと揺れていた。その一直線上の一方の端では、シャピンセイ島の臀部がおとなしい海の怪物の尾のように突き出ていたし、他方の端では、タンカーネスの平地の先にある黒く

2015 年 10 月 7 日受理
* 東北工業大学名誉教授

てずんぐりしたハンマー形のマル岬が海に突き出ていた。海辺から少し離れた我々の農場の麓を、母親の教区であるディアネスへの街道が走っていた。それゆえ、ディアネスはずっと近くにあるように思えた。道路は急カーブで右折し、丘の頂上の向こう側へと消えていった。リース（Leith）からカークウォール行きの船がインガネス湾の向こうの大海原を航行していた。トロール船はどんな天候のときも現れて、暗い海を白波を立てながら進んでいた。一頭立て二輪馬車、大型四輪馬車、自転車、それにバンなどがディアネスロードを走っていた。私はこれまでこうした乗り物を見たことがなかった。ワイア島ではこのような道路はなかったし、またその用途もなかった。シャピンセイ島には砲台があり、土地の志願兵が使っていた。晴れた夏の夕暮れには、白くて脱脂綿のような煙が空中に舞い上がるのを見ていたし、また砲声が聞こえないかと耳をすましていたものだが、砲声が聞こえたのはしばらくたってからであった。

小川が上手にある二つの水車用貯水池から家の側を流れていた。この水が脱穀水車を回していた。小川を見下ろす緑の土手には、小さな突き出た芝土の棚があり、五月になると、そこはサクラソウで被われた。私はそこでよく遊んだ。棚の下には水たまりがあって、カエル――カエルしかいなかったように思われた――が毎年泳ぎ回っていた。そのとき初めてカエルをみた。ワイア島にはカエルがいなかったのだ。ガースではまた、ネズミ、ハツカネズミを初めてみた。毎日学校への行き帰りの途中で渡るワイドフォード川(Wideford)の側でサンザシや野生のバラを初めてみた。この辺りには、ディアネスロード沿いの干からびた木々の木立ちやインガネス湾のはずれにある大きな家の側の黒々とした茂み以外に、何の木も生えていなかった。周辺にはノルウェー語の名前の農場があったが、その大半は忘れてしまった。今でも覚えているのは、クヴォイダンディ(Quoydandy)、ワイドフォード、グリムズクヴォイ（Grimsquoy）、グリムスター(Grimster)ぐらいである。風景は荒々しく、ひなびた感じで、まるで二流の武勇伝に出て来るような風景だった。ワイア島やその周辺の島々にあったような美しくて柔らかい色調はなかった。赤色のエディ島(Eday)、塔が聳え立つ深緑色のエギルセー島(Egilsay)、濃い藍色の丘があるラウジー島とは違っていた。海の青色も何となくくすんでみえた。

ガース――おそらく、この土地の人たちのもともとの発音はガート（Gert）であったろう――は丘の中腹にあり、畑は、一箇所だけ町の下の方にあったが、それを除くとすべて海の方に向いていた。その一箇所の畑の背後には沼地とヒースの野原が広がっていた。冬になると、沼地の水がしみ出て、農家の中庭を黒い泥沼に化してしまうのだ。貯水池も溢れ、小川の水も茶褐色になって溢れた。我々は水車の桶に水を誘導したが、成り行きまかせのゲームみたいなものだった。それというのも、水の流れは機械的な正確さでその桶をこまのようにくるくると回し続けただけだったからだ。水は勢いよく流れたり、ちょろちょろと流れたりして、あたり一面にしみわたっていった。中庭の泥沼は我々の長靴をも吸い込んでいったし、家の敷石も湿気でうっすらと濡れていた。だが、夏になると、そこはとても快適な場所となった。

ガースに来てから間もないある朝、父親は私の手をとり、三マイル離れたカークウォールに向かった。我々はワイドフォード川を渡り、大きくて立派な農場の建物を通り抜け、均整のとれた格好のよい住宅を通過し、それから街道を通り、クヴォイダンディーの側の丘を登っていった。すると、眼下には、赤くて大きな聖マグヌス教会が真ん中に聳え立つカークウォールの町が見えた。裕福な商店経営者たちの住む立派な家や庭が立ち並ぶダンダス・クレセントに到達し、清潔で効率的な学校を通過した。学校の運動場では子どもたちはすでに叫び声を上げていたが、その叫び声は時折一つになって高い調べへと化していった。それから子どもたちは鳥の群れのようにばらばらに飛散していった。父親は、手前に大きな木がある、高くてがっしりした家の門を入り、戸口をノックし、メイドが戸口を開けたとき、マキューアン氏に面会を求めた。しばらくして、メイドが戻ってきて、本が詰まった部屋に我々を案内してくれた。この部屋には、禿げ頭の、茶褐色の先が細い顎髭をはやした、小柄でまるまる太った、茶褐色の目をした男性が座っていた。マキューアン氏は立ち上がって、父親と握手をした。父親は私をカークウォール・バロウ校に入れたいと言った。二人はしばらく話をしていた。それから、マキューアン氏は、椅子から立ち上がらずに、手を伸ばして私の腕を掴み、彼の方に引き寄せた。それで、マキューアン氏の洋服の匂いを、ドライクリニーングの、ブラシのかかった匂いを嗅ぐことができた。至近距離から彼は、まるで私にではなく、私の顔にのみ興味があるかのように私の顔をじっと見つめ、ただ私の顔を彼の方に近づけるために、（まるでレバーを引くかのように）私の腕を引き寄せた。彼はしばらく私の顔を見つめていたが、微笑んで、私の腕を解き放したときに腕をちょっとつねり、学校が好きになってくれるといいねと言った。しばらくして、時間はもうほとんど九時であったが、父親といっしょに学校に行った。学校で

私は父親にさよならをした。父親は悲しそうな顔をしていたが、励ますように私を振り返ってみた。ベルが鳴った後、マキューアン氏はざわめく廊下を通って、幼児クラスの一つに案内し、私を先生と他の生徒に紹介し、私が椅子に座るのを見ていた。私は彼のクラスには行けなかったが――彼は上級の生徒しか受け持たなかった――彼は優れた教師であると評判だった。あの最初の至近距離からの凝視には肝をつぶしたが、彼はいつもとても優しかった。

カークウォール・バロウ校は大きな学校で、スタッフも多く、生徒は数百人いた。ワイア島の学校は好きでなかったが、ここはそうではなかった。もはや自分の意思で時計の針を進めたりはしなかったし、閉じ込められたような感じも消え失せていた。学校に馴染んでいたからだ。私は大人になり始めていたが、毎朝ガースから学校へ出掛けていくこと、カバンを背負って、最初の数歩を踏み出し、学校への道を一歩一歩歩いていくのがいやだと思った日々が何か月も続いた。それでもこれらの各段階ではまだ希望がわずかにあった。しかし丘の天辺に到達し、カークウォールの町を眼下に眺めると、最後の希望は消え失せた。そして、まるで腕が縛られ、監視官が私の後を歩いているかのように、坂を下っていった。ダンダス・クレセントをのろのろと下っていくと、学校の鐘が鳴り響いた。そしてその鐘の音は、最後は飛んで来るんだぞと言っているように思えた。道が一本しかないことを知っていたので、全速力で走っていった。そして道は、終わりに近づくにつれて、いっそうきつくなっていった。それ以来、動揺していない冷静な目で聖マグヌス大聖堂を見たことはなかった。恐怖の膜が大聖堂に染みついているのだ。というのは、大聖堂は私がカークウォールを眼下に見下ろしたときの朝と関連しているからだ。学校はカークウォールの家並みの背後に隠れて立っていたのだが。

しかし、学校が楽しいと思ったときもあったが、それは教える先生次第であった。男性、女性を問わず、大勢のいろいろな先生のもとを潜り抜けた。どなりつける先生、教鞭で頭を叩く先生、革むちでむち打つ先生(革むちは盛んに使われた)、私に関心をもつ先生、あざ笑う先生(こういう先生は最悪だった)、私が成長するにつれて個人的習癖を知るようになる先生、酒を飲んでいる先生、クラスの可愛い女の子にのぼせている先生、奇妙な歩き方をする先生、あるいは妙な習癖のある先生等々、さまざまな先生がいた。我々は動物園を訪れる客の好奇心をもって先生を研究した。我々にとって、先生は実際、檻の中の動物であったからだ。とても怖いと思った先生もいたが、こうした先生は、動物の調教師のように、催眠でもかけるような目つきで私たちを睨みつけた。私は教室という教室のすべての革製のむちがどんなものかを知っていた。分厚くて官能的なものもあったし、薄くてみすぼらしく、悪意にみちたものもあった。折檻の後、机の上に放置されていたが、むちは眠そうな猫のように冷酷にも優雅に折りたたまれていた。むちの中には先端が火であぶられたものもあった。むちを打ったときにいっそう鋭く刺さるように、である。何人かの男子生徒は来る日も来る日も、日課の一部として罰せられた。それは残酷な儀式であり、我々は、恐れおののきながらも魅了され、押し黙ってそれを見ていた。そして、恐れおののきながら魅了されて見ていたことが我々に加虐趣味を植えつけ、自分では知らぬ間に我々を堕落させていたのかもしれない。手のむち打ちの刑も三回から十二回まであった。一年に三、四回以上はむちを使わない先生もいたが、一方、まるで生きている少年の手ではなく、何か手に負えないものをむち打つかのように、毎日、単調にむちを打っていた先生もいた。私はできるだけむちを避けた。いくつかのクラスではむちのことを完全に忘れることができた。それから学校が好きになった。先生がみな教え方が上手だったからだ。アナンという女の先生はまったくむちを使わなかった。アナン先生は、生意気ではあるが、快活で忠実なクラスを受け持っていた。このクラスの生徒たちはやる気を起こすのに先生の存在を必要としていただけだった。アナン先生は我々に英語を教えてくれたが、先生がいなかったら、文の構成要素の分析といった単調で退屈な作業以外にこの英語という科目の意味を理解できなかったかもしれない。先生は我々の目を開いてくれた。我々は貴族のようだと感じた。というのは、アナン先生のためにやったことは自ら進んでやったからだ。先生は並外れた女性であったにちがいないし、尽きることのない魅力、活力、忍耐をもっていたように思われる。また自信と他の先生が我々に求めた善良さとはまったく違う善良さで我々を満たしてくれたし、我々に名誉にかけて誓わせることもなかった。ただ、我々をあるがままに受け入れ、ある力によって我々を変えたのである。

数百人の男子生徒の中に放り込まれて最初のショックを受けたが、生徒たちは見た目ほど怖くはなかった。彼らと友だちになることができたし、敵をつくらないようにすることもできた。それは私が成長しつつあるという確実なしるしでもあった。他方、事物に対する最初の喜びを失ってしまった。人生には目的があったが、その人生はいっそう無味乾燥なものとなっていった。学習は本

を読んで知識を得る喜びを与えてくれた。私は先生からよく褒められた。これによって私は責任感をもつようになった。もし体が弱くなかったら、悪天候がなかったら、通学距離が長くなかったら、模範的な生徒になっていたかもしれない。こうした事情のために、私は度々学校に行けず、家にいなければならなかった。しかも時々は牛の番をしなければなければならなかった。父親はそれを必要としていた。真冬には、暗くならないうちに家に帰るため、一時にはこの仕事から放免されねばならなかった。春になって泥炭掘りが始まると、家にいたいと熱心に懇願した。というのは、丘の上での長い、明るく日がさす日々に魅了されていたからだ。そうしたことがあって、私は学校を欠席することが多くなった。そして、ある日、長く休んだ後、学校に行ってみると、ジョージ・リード博士は、諦めたような言葉で、「エドウィン君、君の訪問は天使のそれのようだね。訪問の数も少ないし、しかもその間が長いね」と私にあいさつするのであった。私の「科目」はどうしようもなく遅れていた。そして、その科目に実際追いついたのは、私が十三歳のとき、父親が農場を諦め、カークウォールに住むようになったときである。結果として、私が学校に通ったのはたったの一年だけであった。その年の終わりに、我々はグラスゴーに行き、私の学校教育はそこで終わったのである。

ガースでの歳月は、いってみれば、私が大人になりつつある歳月であった。それゆえ、私の記憶は曖昧であり、真実とはいえないものである。当時、私は移り変わる鏡のようなものに過ぎなかったからだ。いやそれですらもなかった。私は物事をありのままではなく、何年か経ったらそうあってほしいというふうな捉え方をしていたからだ。私の遊びは真剣な人生の営みのリハーサルのようものだった。水車用池でおもちゃのボートを操り、近所の少年たちのボートと競争した。またおもちゃの耕作機械の鋤で芝土に小さな溝を掘り、その結果を競うといった遊びもした。エチュウバイやムラサキガイを採集するためにインガネス湾まで遠出したり、ワイドフォード川で釣り糸と針でマスを釣ったりもした。私はワイア島でただ漫然と見ては考え込んでいたおもちゃよりもこうした遊びに喜びを見出した。こうした遊びは、自分が到達したいと願い、また未知の栄誉が得られると思った状態を示していた。農場の仕事はもううんざりだった。牛の番をしたり、牛をカラスムギに近づけないようにするのは、その夢のなかで暮らしている人々にとっては退屈ではあるが、必要な仕事であった。しかし、おもちゃのボートレース、おもちゃの耕作機械による試合、それに魚が決して釣れない曲がった釣り針は、これらを続けていけば、すぐにでも大人になれるのではないかと思わせてくれる不思議な力をもつ魔法のようなものだった。

なぜだかわからないが、九歳頃から、印刷物をまるで貴重な栄養物でもあるかのように、精読、精査し始めた。我が家には、聖書、『天路歴程』、『ガリヴァー旅行記』、ハドソン湾に関するR.M.バランタイン（R.M. Ballantyne 一八二五― 一八九四、スコットランド生まれの小説家。少年向きの小説を多く書き、中でも *The Coral Island*（一八五八）が有名＝訳者註）の本以外に、読むに値する本は何もなかった。この農場の前の小作人が台所の上のロフトに週刊紙や古本を乱雑に積み重ねて残していった。また数年前の『ザ・クリスチャン・ワールド』（*The Christian World*）（だったと思う）と呼ばれる新聞が多数あった。その新聞に載っていたのは、会合や大規模な会議、聖職者任命の公示などの記事や死亡記事くらいであった。それでも私はそれらの記事をはじめからおわりまで読んだ。また、革装丁の分厚い本もあった。その本は十九世紀中頃のある時期になされたプロテスタントの神学者とカトリックの司祭との論争の逐語的な報告書であり、実体変化（エウカリスティア祭儀で、パンとぶどう酒の実体がキリストの体と血に変化するというキリスト教の教え。変体説ともいう＝訳者註）に関する長い議論とドゥエー聖書（カトリック教徒のためにラテン語訳聖書（Vulgate）から英訳された聖書。新約は一五八二年ランスで、旧約は一六〇九年―一〇年にかけてドゥエーで出版された。ランス－ドゥエー聖書ともいう＝訳者註）への多くの参照が付されていた。ドゥエ聖書への参照にはとても困惑した。というのは、ドゥエー聖書がどんなものか知らなかったからだ。女性のことを扱った小説もあった。今思うとそれは『分別と多感』（*Sense and Sensibility*）だったにちがいない。この小説は理解できなかったが、それでも読むことは読んだ。また、父親がサンディ島からもってきたもので、今ではどうしようもなく乱雑に放置されていた『スコットランド偉人伝』（*Scots Worthies*）の各月号に注意深く目を通し、修理したり、順序よく揃えたりした。そしてそれは各月号毎に途切れなく揃ったものとなった。父親はこの孝行にいたく感激し――というのは、父親はその本を神聖なものと考えていたから――私のためにそれを一冊の立派な革装丁本にしてくれた。それは一千ページにも及ぶ大冊であった。こうしたことがすべて私の頭をよぎった。それは何の栄養もないものだったし、何の痕跡も残さなかった。私は何か強制されたかのように、また頭が食べものを求めていたかのように、これらを読んだ。食べるものがないときは、ふすまでも

食べなければならないのだ。学校の新しい教科書は手にするや全部読んだ。『ザ・ピープルズ・ジャーナル』(*The People's Journal*)、『ザ・ピープルズ・フレンド』(*The People's Friend*)、それに『ザ・クリスチャン・ヘラルド』(*The Christian Herald*)なども読んだし、当時『サンデー・ストリーズ』(*Sunday Stories*)と呼ばれたセンチメンタルなラブストーリーのシリーズものも全部読んだ。放縦の危険と質素倹約の美徳を説いた小説も読んだ。兄のウィリーがもっていた『ザ・ペニー・マガジン』(*The Penny Magazine*)という新しい定期刊行の雑誌も読んだ。これは『ティット-ビッツ』(*Tit-Bits*、イギリスの大衆週刊紙で、一八八一年、サー・ジョージ・ニューンズによって創刊。時事的な記事や大衆的な小説類を掲載。一九八四年休刊=訳者註)をモデルにしたもので、ありとあらゆる無益な情報が掲載されていた。私は子ども向けの本や童話などは一切もっていなかったが、父親の魔女の話がそれを補ってくれた。

これらすべての読書に関して今でも残っている記憶がたったひとつだけある。物語そのものは忘れてしまったが、舞台はイタリアで、ひとりの乞食が重い粗布の大袋をもってとある農家にたどり着き、彼曰く、納屋に行って少し眠る間、その袋をある場所の片隅に置いておいた。一人で住んでいたその農家の女性がたまたまその袋に触ると、袋が動くのに気づき、その袋の中には自分を殺しにきた人が入っているとすぐに気づいた。袋の中の人殺し、男の背中に担がれ、人を殺すためにどさっと置かれた人殺しをイメージすると、心が押しつぶされた。そしてこのイメージは私の夢の中にも入ってきた。夢の中で私は、もんどり打って倒れたり、転げ回ったり、跳んだり、登ったり、滑ったりする、狂ったような袋に、また耳が聞こえず、口がきけず、縛られてはいるが、死人のような姿をしたものに野原や溝を追いかけ回された。数年後、『宝島』(*Treasure Island*)を読んだが、盲目の水夫ピューの恐ろしい姿を知り、この夢の恐ろしさを思い出した。

もうひとつ同じくらい恐ろしいと印象づけられたものがある。それは物語ではなく挿絵であった。サザランドはときどきリース(Leith)に住む従兄弟から『ザ・ポリース・ニューズ』(*The Police News*)(だったと思う)という週刊紙を送ってもらっていたが、これは残酷な犯罪を記録した新聞だった。サザランドはある日それを台所に置き去りにしていた。私はいつもの催眠術にかかったような関心をもって新聞を取ろうとして近づいて行った。表紙には、シャツ姿で斧を頭上に振りかざして立っている屈強な男の絵があった。彼の口髭は先端が巻き毛になっていた。髪の毛は真ん中できちんと分けられていた。彼はそこにまるで兵士のように直立して立っていた。顔の表情は古風な写真によく見られる表情であった。彼の面前のベッドにはショールを身にまとった女性が頭を真二つに割られて大の字になって寝ていた。私がその新聞を取ろうと手を伸ばすと、父親はさっとその新聞を取り上げ、ポケットに押し込んだ。そして「これはお前が読むものではない」と厳しく言った。サザランドはそのすぐ後に家に入ってきた。父親は「ほら、サザランド、お前のこのくだらないものをきちんとしまっておけ」と叫んだ。サザランドはおどおどして父親に目をやり、それから新聞に目をやり、手にとってどこかで読むために外へ出ていってしまった。それでも、その絵はあの袋の人殺しほどには私の心にさほど深い影響を与えなかった。袋の中の人殺しは、隠れていて定まった姿がなく、それでいて無数の姿に変わることができた。この人殺しの姿は、後に何年もの間私の夢の中に現れ続けた。

子どもの想像力というものは信じられないくらい鮮明なものである。ためになったのか、災いになったのかわからないが、兄のウィリーがまったくの親切心から、私のために『チャムズ』(*Chums*)を取ってくれた。『チャムズ』は当時、『ザ・ボイズ・オウン・ペイパー』(*The Boy's Own Paper*)の一番のライバル紙であった。『ザ・ボイズ・オウン・ペイパー』はずっと後になってからみたが、不可解な上流気取りに溢れたパブリック・スクールの学校生活の物語は、実に退屈なものだった。『チャムズ』の得意としたのは未開地での冒険物語であった。そこには先の尖った顎髭をはやした英雄、柔らかくてもじゃもじゃの顎髭をはやした正直顔の船乗りたち、それにフランクという名の少年が登場した。この小さな冒険隊は日がささない深い峡谷を踏破し、ワニがうじゃうじゃいる川を渡り、密林を切り開いて進み、さらに性悪な、きれいに髭をそった白人に唆された未開の部族と戦ったりした。一方でライオン、トラ、クマ、ヘビの攻撃をもかわしていった。こうして冒険隊は財宝をもってイギリスに帰還したのだが、腐りかけていた埠頭の揚げ蓋から落下し、しずくのたれる地下牢の中で呻吟していたが、ついにすでに地下牢を脱出していた船乗りたちは、慈悲深いミュージックホールのコーラスのように、みんなを救うために戻ってくるのである。船乗りたちは屈強な握りこぶしを悪党の顔に一発喰らわせようとしている絵柄の入れ墨を大々的に入れていた。こうした冒険をたどっていくときの興奮は喜びというよりは苦痛であった。そして何もかもが私にとってはとてもリアルだったので、丘の斜面で牛を放牧しているときも、背後にトラが

潜んでいるのではないかと肩越しに振り返ったものだ。頭の一部ではオークニーにトラがいないことはわかっていたが、頭の神経質な振り返る運動には抵抗できなかった。

私はこうしたがらくた記事をむさぼり読んだ。これらの記事には、つまらないものもあったが、わくわくするようなじつに面白いものもあった。十一歳になり、トマス・モア卿（Sir T. More 一四七八―一五三五、 ヘンリー八世王治世下の大法官、人文主義者、ヘンリー八世の宗教改革を認めなかったため処刑される。『ユートピア』などの著書がある＝訳者註）、フィリップ・シドニー卿（Sir P. Sydney 一五五四―八六、エリザベス朝時代の詩人、廷臣、軍人。『詩の弁護』などの著書や詩集がある＝訳者註）、ジョン・エリオット卿（Sir J. Eliot 一五九二―一六三二、チャールズ一世王治世下の政治家、演説家。下院の指導者としてチャールズ一世の政治を批判したためロンドン塔に投獄され、獄中で病死した＝訳者註）の伝記が載っている学校の歴史教科書を読むようになったとき、読書というのはまったく違うものなのだということを知った。私がそれまで読んできた本は貧弱なものだったに違いなかった。というのは、夜の街は「死人のように静まり返っていた」といった意味の文章でダマスカスを描写していたこと以外に何も覚えていないからである。もちろん、『カサビアンカ』（*Casabianca*）（英国の詩人 F. D. ヘマンズ 一七九三―一八三五 の詩。アブキールの海戦で自分が乗った艦船が英国軍の手に帰するのを恐れ、自ら爆破して壮烈な最期をとげたフランス軍艦長ルイ・カサビアンカをうたったもの＝訳者註）、『ウリン卿の娘』（*Lord Ullin's Daughter*）（スコットランドの詩人 T. キャンベル 一七七七―一八四四 の短詩＝訳者註）、『エクセルシア』（*Excelsior*）（アメリカの詩人 H.W. ロングフェロー 一八〇七―八二 の詩＝訳者註）、その他子どもたちが喜ぶと思われていたつまらない詩（他のすべての人と同様、私もつまらないと思った）などを学ばなければならなかった。その後十二歳になったとき、『逍遙編』（*The Excursion*）の抜粋、『チャイルド・ハロルドの巡礼』（*Childe Harold's Piligrimage*）の一部分、『聖アグネスの前夜』（*The Eve of St. Agnes*）『アドネイス』（*Adonais*）、『ハーメルンの斑服の笛吹き』（*The Pied Piper of Hamelin*）、それにマシュー・アーノルドの『トリストラムとイズールト』（*Tristram and Iseult*）などが入った本当に優れた詩集を手にした。『チャイルド・ハロルドの巡礼』と『ハーメルンの斑服の笛吹き』は毎年暗記させられたが、『ハーメルンの斑服の笛吹き』は好きにはなれなかった。子ども向けの詩として意識的に書かれたもので、自分を意識させたからだ。また『チャイルド・ハロルドの巡礼』は、私にとっては非現実的に思われた。それで、立って、

夜はお祭り騒ぎだった、
そしてベルギーの都は当時
美女たちと士官たちを集め
明かりは美女たちと勇敢なる男たちを
明るく照らし、

を暗唱したとき、以前よりももっと感動すべきなのにしなかったことに不快感を抱いた。スコットランドのバラッド選集だったら、私の年代の子どもたちにはもっと直接に訴えたであろうが、驚いたことに、これらの美しい詩はスコットランドの学校ではそれほど使われていなかった。この詩集の中で私が一番好きになった詩は『聖アグネスの前夜』と『トリストラムとイズールト』だった。そして当時感動を与えてくれたいくつかの詩行は今なお言い尽くせない感動を与えてくれる。

小さな扉をくぐり、老修道士は北の方へ向かったが、
三歩も歩まぬうちに、音楽の金色の舌が、
この哀れな老人を涙が出るほど嬉しがらせた。

この詩にはもっと美しい詩行があったのだが、なぜこの詩行に十二歳の私が感動したのかわからない。アーノルドの詩の次の一行

キリストよ！何という夜だ！霙が窓ガラスを鞭打つとは！

にもとても心が打たれた。というのは、この一行は部屋に明かりがつき、外は暗く荒れ狂う北方の夜を鮮明に描き出しているからであり、また詩というのは自分自身がよく知っているものでつくれるものだということを教えてくれたからである。『アドネイス』は、私の理解できない崇高さに満ち溢れていたように思われる。そして、『逍遙編』の抜粋は理解できなかった。この詩集はよくできていたので、おそらく抜粋も精選されたものであったろう。

この時までには大人になったら作家になろうと私は心に決めていたが、父親と母親は、「世俗的な」文学を罪と見なしていたし、小説は大嫌いであった。また詩というのは無益なものと考えていたので、作家になろうという私の意思にやや不安を感じ、子どもじみたこじつけで自分が書くべき本はイエスの生涯だと心に決めたのである。そうすれば、すんなりと宗教と文学の両方の要求を満たすことができると考えたのである。『ザ・クリスチャン・ワールド』の中で絶賛されていたデ

ィーン・ファラー(F. W. Farrar 一八三一—一九〇三のこと。カンタベリー大聖堂の首席司祭=訳者註)のキリストの生涯を知っていたのでこの考えが浮かんだのである。しかし、この段階は短期間しか続かなかった。というのは、ある日カークウォールで、そこの店に働きに行っていた兄のジョニーから三ペニーの小遣いをもらった。私は直ぐに、「ザ・ペニー・ポエッツ」(The Penny Poets)を売っている書店に行き、『お気に召すまま』(*As You Like It*)、『地上の楽園』(*The Earthly Paradise*)(英国の詩人 W. モリス 一八三四—九六 の長編詩=訳者註)、それにマシュー・アーノルドの詩選集を買った。ジョニーは、後で私に会ったとき、私がそんなふうにお金を使ったことに腹を立て、いささか気分を損ねた。彼としてはそのお金で私を楽しませたかったのである。私は彼がどうして怒っているのか理解できなかったが、三冊の黄色いカヴァーの本を手にもって立ちながら、罪なことをしたと思った。

アーノルドの詩から得るものはあまりなかった。『孤独な人魚』(*The Forsaken Merman*)以外に、『トリストラムとイズールト』のようなものはなかったし、『スコラー・ジプシー』(*Scholar Gypsy*)や『サーシス』(*Thyrsis*)に出てくる南イングランドの片田舎の豊潤な情調は私に何の反応も呼び起こさなかった。私が知っているのは北方の木の生えていないむきだしの風景だからである。私の詩の楽しみ方はまったくの行き当たりばったりだったが、自分がこれから入り込もうとする世界について何も知らなかったからである。『お気に召すまま』は楽しく読んだが、何度も何度も繰り返し読んだのは『地上の楽園』であった。もちろん、その小さな本にはモリスの長大な詩がすべて入っていたわけではなかったが、物語はやさしいことばで語られ、ときどき詩も抜粋されていた。アトランタとりんごの話、ペルセウスとアンドロメダの話、デーン人オウジアと北方の勇士と女傑の話などである。私の慣れ親しんだ田舎に新たな種族が、即ち女神たち、美しい女性たち、それに勇敢な戦士たちが北方の低い空のもとに現れたのをみているような気がした。というのは、ギリシアの物語が、私にとってはオークニーによく似た風景の中で展開されていたからである。

この観点から、私は教科書や週刊紙に載っている偉大な作家や詩人に言及しているすべての記事をやや熱心に追跡していった。これらの作家や詩人の作品について何も知らないのに名前を崇拝していた。スペンサー、シェイクスピア、ミルトン、ドライデン、スウィフト、ゴールドスミス、ワーズワース、コールリッジ、テニソン、スウィンバーン、マコーレー、カーライル、ラスキン——こうした名前は私にとっては魅力的だったし、またクリストファー・マーローとかジョージ・クラブといった名前を新たに見つけたりすると、それは秘宝への追加のようなものだった。私のこの情熱を知る者はだれもいなかったし、またこの情熱について語る相手もいなかった。ある日、カークウォールの書店のショーウインドーにカーライルの伝記が陳列されていた。それを買うのに母親に一シリングほしいと懇願したが、その伝記は一シリング三ペンスだった。私はがっかりして代わりにウォレス(Sir W. Wallace, 一二七二?—一三〇五、スコットランド独立のためにイングランド王エドワード一世と戦った国民的英雄=訳者註)とブルース(Robert the Bruce, 一二七四—一三二九、スコットランド王。バノックバーンの戦いでイングランド軍に勝ち、スコットランドの独立を確保した=訳者註)に関する本を買って家に帰った。それはよい本ではなかった。私が覚えているのはバーンズの数行だけである。

> 春の洪水の中、ウォレスの名を聞いて、スコットランド人の血で湧き立たない血があろうか!
> 恐れを知らぬわが先祖たちはいくどとなく
> 　　ウォレスの側を
> 闊歩し、常に血濡れた足で進軍し、
> 　　あるいは名誉ある死を遂げたことか!

これらの詩行は、今ではすっかり消え失せてしまったが、当時は豊かで暗い冬の魔力をもっていた。しかし、私自身の本来の興奮を喚起してくれたのは、唯一“red-wat-shod”(血濡れた足で)という句だけだった。

ガースにいる間、私の文学の知識は、偶然だったが、また偶然の発見によるものだったが、増していった。私は英文学の課程を履修したこともないし、読書や読書法に関して指導を受けたこともない。このことは大きな欠陥であった。カークウォールに住むようになってから、読書の機会が大幅に増えた。本を貸してくれる図書館があったからだ。しかし、その利用法は賢明ではなかった。まったく理解できない本を多数読んだからだ。色々な英文学史の本を読んだことはとても賢明な選択であったが、ヒューム(D. Hume 一七一一—七六, スコットランドの哲学者、歴史家、政治家。『人性論』などの著作がある=訳者註)やスターン(L. Sterne 一七一三—六八, 英国の牧師、小説家。『トリストラム・シャンディ』などの小説がある=訳者註)の批評的研究は私の手に負えるものではなかった。私がヒュームを論じた本をもっているのを父親がみてたいそう狼狽し、それを直ちに返してきなさいと言った。父親にとってヒュームは「典型的な無神論者」で

あった。我が家ではこの言葉は恐ろしい言葉であった。十一歳から十四歳まで、めったにない喜びを期待しつつ、驚くべき忍耐力をもって読書を続けたものの、間違った読書をして相当の時間を無駄にした。圧倒的に暗いという感じは英語版で読んだユーゴの『パリのノートルダム』(*Notre Dame de Paris*)と関連しているし、反対に、赤々と明るいという印象は『緋文字』(*The Scarlet Letter*)と関連しているが、それがすべてである。カーライルの『フランス革命』(*French Revolution*)のなかで印象に残っているのは、暗雲の割れ目から垣間見られる光り輝く山腹のような一文で、黄金に輝く麦畑がフランスの津々浦々に広がっている明るい夏の夕暮れ、宮殿で肩丸出しの貴婦人たちがフランス宮廷の紳士たちと踊っている様子を描いた一節である。

奇妙なことだが、私が最もよく覚えているのは、『ザ・オークニー・ヘラルド』(*The Orkney Herald*)が発行していた年報に載っていたグロテスクでばかげた物語である。それはオークニーとシェトランド諸島の起源に関する物語であった。物語によれば、大きなドラゴンが昔北方のある所に住み、そこに住んでいた民の息子や娘を食べていた。とうとう、国の荒廃を見るに堪えられなかった王様の息子が立ち上がり、このドラゴンの息の根をとめる決意をした。彼は小船に乗って出掛け、夜陰に乗じて波間でうだるような暑さに苦しんでいるドラゴンに近づいていった。ドラゴンは眠っていた。王子が近づいていくと、ドラゴンはふいとあくびをした。王子は機を見てドラゴンの口の中に入り込み、のどを下り始めて、広々とした通路の中に侵入した。数時間後明かりを灯すと、肝臓に達したことがわかった。粗麻糸を燃やし、それでドラゴンに火をつけて、戻り始めた。最初のうち火の熱さはドラゴンをむずむずさせ、喜びで身震いさせた。王子がのどのところまで戻ってくると、はるか後方に大火事の真っ赤な炎を見ることができた。とうとう王子はドラゴンの大きな歯にあたって打ち砕かれるのではないかと思った。とそのとき、ドラゴンは不快な匂いのする大きなげっぷを出した。それで王子は半マイルほど先の海に放り出された。王子は船の帆を揚げ、懸命に櫂を漕いだ。そして大急ぎで逃げた。ほどなくして、暴風が吹き荒れた。振り向くと、王子はドラゴンが水平線上の海水を打ち付けたり、頭と首を持ち上げたり、ねじったり、沈めたりしているのを目にした。この死の苦しみのなかで、ドラゴンは歯が抜けてしまい、その歯がオークニーとシェトランド諸島になった。それから体を大きなベルトのように大地に巻きつけた。これが陥没して大西洋になった。この物語の作者がだれであるかわからない。古い話か、もしくはだれか進取の気性に富むオークニーの島人の最近の作り話かもしれない。この話に二度と出会うことはなかったが、この話は私がドラゴンの夢をたくさんみてきたことを幾分説明してくれるかもしれない。当時はその話をただ面白く読んだだけだったが。

その頃、私は次第に周囲の人々を個人として認識するようになった。ブーでは、我が家族は変動のない不可分な家族の見本みたいなものだった。しかし、今では兄や姉たちはそれぞれ別個の姿になり、気づいてみたら分裂がこの世に侵入していた。家族がばらばらになり、次から次へと家を出て行ったので、この感を強くしたのである。カークウォールで働いていた一番上の兄ジミーが我々と離れて暮らすなどとは考えられなかった。それでも我々に会いにガースに来るときは、彼は明らかに家族の一員であった。この家族としての一体感と離散のパラドックスは私の心をかなり苦しめた。兄はカークウォールで我々の生活とはまるで違う生活をしていたが、我々に会いに来るときは、私が子どものときに知っていた、そして尊敬していた兄だった。我々がガースに移住してから間もなく、彼はさらに遠く離れたグラスゴーに行ってしまった。そしてその後は、年に一度夏の休暇に会うだけとなった。それから今度は二番目の兄ウィリーも不満を抱き始めた。父親は彼が満足していないのを知っていたので、彼がカークウォールの法律事務所に入るのを許した。この流れは続いた。我が家族の中に発酵が始まったかのようであった。それはどんな力をもってしても止められなかった。三番目の兄ジョニーと姉のエリザベスも家を出ていくかどうかでとても苦しんでいた。二人とも農場の仕事には欠かせない存在であったからだ。しかし父親は、理解できないまま、諦めねばならなかった。エリザベスはエディンバラに、ジョニーはカークウォールに行った。家族は中心では一つにまとまっていた。内的分裂もなかったし、不和もなかった。何かまったく非人格的なものが我々を周辺のあちこちに蹴散しているかのようであった。もしガースがもっといい農場であったなら、あるいは街から三マイルでなく二十マイル離れていたら、こういったことは起こらなかったかもしれないし、我々の何人かはもっと幸福な生活をしていたかもしれない。というのは、オークニーで農夫であることは今では楽しい運命だからだ。オークニーはおそらく英国で最も繁栄し、上手く運営されている幸せな社会である。ガースは割に合わない農場であったし、カークウォールは近かったし、エディンバラとグラスゴーは、カークウォールからは次の踏み石にすぎなかったようだ。我々がこの道を辿るのを防ぐ

力はどこにもなかった。父親が農場をあきらめ、一年間躊躇した後、ジミーの懸命な助言にも耳をかさず、グラスゴーに行くことを決意し、我々もいっしょについて行ったが、これはとんでもない間違いであった。

一番上の兄ジミーは我々兄弟のなかで一番父親に似ていたと思う。彼は父親と同じ繊細で穏やかな性格で、同じく人を楽しませる感覚をもっていた。二番目の兄ウィリーは、もうずっと前に死んだが、一風変わった、冷笑的でとても聡明な少年であった。生きていたならば、名を成したかもしれない。彼は容貌や性格が他の兄弟姉妹とは違っていた。また背は高いが、態度や動作がぎこちなく、いつも浮かぬ顔をし、意気消沈しやすかった。我々が不用意にやることを彼は慎重に上手にやった。彼は田舎風にヴァイオリンを弾くことに満足せず、音楽の理論をマスターし始めた。そして土地のヴァイオリン弾きにヴァイオリンの弾き方が不自然だと不平を言われたが、彼は彼らよりもはるかに上手く弾いたし、十分な知識をもっていたので、そのことを知っていた。彼は兄弟のなかで一番力が強く、五六ポンドのバーベルを一気に地面から頭上まであげることができた。無口ではあったが、うぬぼれや見せびらかしには我慢がならなかった。また我々よりも明確な世界観——ややスウィフト的な世界観——をもっていたし、何をしたいのか、どのようにそれを始めたらよいのかも知っていた。死んだとき、彼はエディンバラの事務所で働きながら法律のコースに進もうと勉強をしていた。子どものときは、この兄とはあまり関わりがなかったが、知的な世界を自分で見出しつつあったグラスゴーではとても親密になった。

三番目の兄ジョニーは早口で冒険心に富んでいたが、目と下あごはさながら水夫のそれであった。彼は軽率だが陽気で、すぐに友だちができた。彼はいつもたちの悪いいたずらをしようとしていた。そして農場の仕事には苛立っていた。その結果、不満が度々爆発した。彼は船乗りになりたかったのだ。そしてかつては熱心に軍隊に入隊しようと試みたが、父親はこれに驚いて腹を立てた。ジョニーは船乗りになったほうがよかったかもしれない。カークウォールの店では息苦しさを感じていたからだ。世界中を旅している男たちに彼は引かれていた。そして、彼の早口で機知に富んだ話はこうした男たちを楽しませたし、毎晩我々を笑わせた。彼はウィリーの死のおよそ二年後、グラスゴーで激しく苦しみもがきながら死んだ。

ジョニーの次は姉のエリザベスだが、彼女は物事に熱心に取り組む精神、どんなことにも堪え得る精神をもっていた。まだ少女であったときでさえ、彼女は愚かさや安っぽい感情を軽蔑した。また年齢をはるかに越えた責務を背負っていた。一方、もうひとりの姉のクララは、私と年齢が近いこともあって、子どものときには大の仲良しだった。彼女は親切で忍耐強く、そして厳しいところのない、穏やかな女性であった。また彼女はお人よしで、落ち着いた女性に成長した。二人とももう死んでしまった。

私はガースで兄や姉たちがそれぞれ別個の個性の持ち主だということを知るようになった。我々は一つの家族であったが、同時にそれぞれ違った方向に進み、家族というものの姿を変えていく個人でもあった。それはまるでこの内的な緊張の肉体上の現れであるかのように、我々は次々と病気になった。母親は病気になること数回に及んだ。クララと私は腸チフスにかかり、カークウォールの熱病の病院に運ばれた。これまで一度も痛みというものを感じたことのないサザランドでさえ歯痛に襲われ、たいそうショックを受けてうめき声をあげながら、ベッドに伏せっていた。彼は最期がきたと思ったのだ——それほど痛みは彼にとっては未経験のものだった。家を出て行った者だけが健康であった。

この間、私は生活の多くの時間を家族以外の者と過ごした。カークウォールの学校の多くの生徒たちと友だちになったからだ。当時これらの友情は、他のすべてのことと同様、ほとんど見せかけであって、長続きはしなかった。そして見せかけであるがゆえに、いとも簡単に代わりの友だちができた。また田舎での争い事が耳に入るようになった。女の子が妊娠させられたとか、農夫が女中を誘惑したといったゴシップを聞くようになったのである。これらはそれまでそんな話を聞いたことがなかったような場所での話である。もしそのような農夫のひとりに出会っていたら、そうした性向が彼の顔に表れているのではないかと期待しつつ、彼の顔をまじまじと見ただろう。こうしたことはみな、ほかではスキャンダルであったろうが、ここでは単に面白おかしい、目くじらをたてないゴシップであった。オークニーでは庶出は寛大に見られていたし、ともかく、庶子の父親はほとんどいつもその女性と結婚した。母親はよく七人の庶子をもち、いつも結婚を拒否していたディアネスの女性の話をしていた。母親は、当然、これには賛成できないと考えていたが、この女性のことを「すてきな娘さんだったよ」と言っていた。田舎のゴシップはその後も耳に入ってきたが、ただ聞いているふりをしているだけだった。生殖というのは、おそらく、相思相愛によって発生したのであろう。それにしても、そうしたゴシップに耳を傾けているうちに、自分は大人の世界にい

るのだと思った。

ガースではじめて乞食たちが家にきた。その中に特にジョン・シンプソンという名の年老いた乞食がいた。彼は聖職者ではなく、俗人の説教家で浮浪者であったが、度々我が家にやって来てはその都度大飯を喰らっていった。こうした乞食たちは常に受け入れられ、食べ物を与えられた。ジョン・シンプソンは黒い顎髭をはやし、朗々と響く声の持ち主であった。彼は食べ物でたいそう汚れたフロックコートを着、よれよれの黒い帽子を被っていたが、カラーは身につけていなかった。聖書はいつも持ち歩いていた。そして彼は、奨められもしないのに勝手に台所に膝をついて座り込み、我々をいっしょに座らせて、長々と祈りを唱えるのであった――この習慣は我々にとってははなはだ迷惑であった。というのは、彼が正気を逸していることを我々は知っていたからだ。父親は一度、親切心から、ジャガイモ掘りの仕事を彼に申し出たが、ジョン・シンプソンは、自分はとても具合が悪いのだ――実際、彼は大きくて頑丈な男だった――とか言いわけし、大きな声でその仕事に難癖をつけた。それで父親はその申し出を取りさげるとシンプソンに言った。シンプソンはたらふく食べた後、数日してどこかへ行ってしまった。それから一、二度カークウォールで彼が少年の一団にからかわれながら追いかけ回されているのを目にした。かわいそうにも思ったが、あいそがつきた。彼は子どもたちに説教してくれと頼まれれば、いつでも説教したが、彼の言葉はまったく意味不明であった。

母親からは別な乞食の話を聞いた。その乞食は昔フォリー（Folly）に定期的にやってきたが、自分のお茶と火で料理する食べ物を持参し、納屋で寝ていた。名前はフレッド・スペンスとかいった。彼は生まれもよく教育もあったが、お金と正気をなくしていた。それでも礼儀作法は立派なものだった。彼はときどき自分の妻を絞殺した話をしたが、最後は「彼女の首はとても丈夫だったよ」と上品で気取った声で言いながら、締めくくった。ある夏の日、私は学校からの帰り道、彼に会ったことがある。彼は額の広い、先細りの顎髭をはやしたハンサムな男で、垢で汚れたカニンガム・グレアム（C. Graham 一八五二―一九三六、スコットランドの小説家、政治家、社会運動家＝訳者註）よろしく、とても気品があったが、薄汚れていた。たいそう慇懃な態度で私に名前を訊くので、私は少々怖くなり、名前を告げた。母親から話を聞いていたので、すぐに彼だとわかった。彼の極端に慇懃な態度は、半ば正気を失っているがゆえに、見るからに怖いと思った。それでも私は一歩も引かなかった。彼のことを知りたいという好奇心にかられたからだ。フレッドは燕尾服を着ていた。そして肩まで伸びたもじゃもじゃの白髪まじりの髪の毛の上に黒くて柔らかい帽子を被っていた。彼はまるで高貴なパトロンでもあるかのように、私の学校での勉強の進み具合を、時折「ラテン語！ラテン語はとても大事だよ！」と言いながら、訊いた。それから、父親、母親によろしくと言いながら、王様のようにうわの空で、いきなり帰りなさいと言った。彼は害を及ぼすような狂人ではなかったが、人気のない道端で彼の話を聞いていると、首筋の丈夫な彼の奥さんのことを考えずにはいられなかった。その後、彼の姿を二度と見ることはなかった。

十三歳のとき、父親は農場をやめ、家畜と農具をすべて売り払い、カークウォールの小さな家に住むことになった。マギー叔母は彼女の妹のところで暮らすことになった。アメリカにいるサザランドの親戚が亡くなり、サザランドにいくらかのお金を残してくれた。そしてリースにいた彼の従兄弟たちのところに行ったが、しばらくは音信不通であった。残ったのは、父親、母親、姉のクララ、それに私だけだった。

いっそう熱心に続けた読書を除けば、カークウォールでの歳月は退屈で、荒んだものだった。少年たちは自分たちの未経験の恥を隠すために寄り添うように集まり、知らずしらずのうちに両親や家のきまりに背いたりする段階に達していた。私の乱暴な友人関係は父親や母親に対する間接的な挑戦であったし、隠れた反抗心の表れでもあった。私はフットボールをたくさんやった。それはまるで体が爆発的行動を要求しているかのようであった。フットボールをやった場所はクラフティ（Craftie）と呼ばれ、食肉処理場に隣接したそんなに広くない草地であったが、所々土がむき出しになっていた。粗野で不満を抱いていた我々にとってこの食肉処理場は忌まわしい魅力をもっていた。そして血と内蔵の強烈な悪臭とくすんだ色がプレイをしている我々につきまとっていた。我々の言葉と振る舞いは荒々しくなっていったし、交友関係でさえ刺々しいものであった。クラフティでは激しい殴り合いの喧嘩がよく起きた。少年たちは、ひょっとして、怒り狂い大声をあげながら、互いに殺し合いをしていたかもしれない。だが、少年たちの激しい怒りの背後には悲しい恥辱や欲求不満のようなものが隠れていた。

この年齢の、つまり思春期にさしかかった年齢の少年たちがなぜこれまで楽しいと思っていたことに背を向け、すねた気持ちでそれを粉砕してしまうのかわからない。おそらく、それは子どもの世界ではない現実の世界に対する少年たちの最初の歪んだ知識のせいかもしれないし、また大

人になりつつある時期にやっていた子どものゲームなどは何の役にも立たない、もっと厳しいものが必要なのだという直感的予測が働いていたせいかもしれない。あるいは単に自分が友だちに恵まれなかったのかもしれない。というのは、私は同年配の町の少年たちよりはるかに世間知らずだったからである。それでも自分と仲よくしてくれる人とはいつでも仲よくしようとした。今でも忘れられないのは、もうひとりの別の少年と荒っぽい言葉をまったく使わずに、花を摘んだり、鳥の巣を見ながら、ワイドフォード川の川岸をぶらぶらして過ごしたよく晴れた夏の日のことである。クラフティでの実に破廉恥な日々(当時は気づかなかったが)ではなく、あのようなほんとうに幸せな日をなぜもっと過ごさなかったのだろうか。我々はクラフティに催眠術をかけられていたのだ。我々はフットボールのボールを憎しみを込めて蹴ったし、我々の間の絆にも深い敵対感情が潜んでいた。

こうしたことは、すべて我々がグラスゴーへ行く前年のことであった。その年の冬、マックファーソンという、ほっそりしていてやや張り詰めた青年で、信仰復興運動の説教師がカークウォールにやってきて、人々を回心させ始めていた。我々がガースにいたとき、大物の福音伝道師である有名なジョン・マックニールがオークニーに短期間滞在し、我々が通っていたカークウォールの教会で説教したことがあった。彼のことをぼんやりと覚えている。黒い顎髭をはやした体が大きくて、がっしりした愛想のよい人物だったが、礼拝の間中会衆を笑わせて、戸惑わせた。彼はとても機知に富んだ人物だったが、彼が回心させた人はほんのわずかであった。我々島民はからかわれて救われることを拒んだのだ。その後、二人の復興運動家がいっしょにやってきた。ひとりは体が痩せており、小柄で緊張していたようだったが、業火について説教し、もうひとりは、背が高くて、がっしりしていて開放的だったが、神の愛を説き広めていた。我々は日曜日の夕方二人の説教を聞きに行った。礼拝の終わりに、説教師がキリストのもとに会衆を呼び寄せたとき、多くの者が座席から立ち上がった。私は興奮してあたりを見わたしたが、周囲の人々のうれしそうな心の動揺が理解できなかった。我々が教会を出たとき、ふたりの説教師が戸口の両側に立って、会衆と握手をしていた。戸口の我々の側に立っていたのは体の大きな善意のこもった説教師であったが、彼は大きな慰めの手の中に私の手をとり、私を見下ろして、「この小さな坊やはキリストのもとに来ないのかな」と父親に言った。父親は私を庇護するために、私がまだ幼くて年端もいかないといったような意味のことをつぶやいた。「何ですって。やさしいイエスのもとへ行くのに幼くて年端もいかないですって」とショックを受けたような声で説教師は言った。父親はこの返答にとても感銘したようで、その後たびたびその返答を繰り返していた。だが、その説教師は実際見かけほどにはショックを受けていなかったように思えた。

こうしたことは、私が十歳か十一歳のときに起こったにちがいない。私はもう十四歳だったが、本を読んでいるときだけが幸せだった。マックファーソン氏が島に来たことにも注意を払わなかった。私といっしょに歩き回っていた少年たちは、マックファーソンの回心者たちに会うたびに彼らを嘲った。少年たちの知り合いの何人かが救われていたのだ。その後、姉のクララが回心したので、喜んだ母親はクララにいっそう近寄っていった。家では私は独りぼっちだったが、『レ・ミゼラブル』を読み、自分も高貴なものを愛することができるのだと考えて自分を慰めた。しかし、次第に自分とは関係のない力によって、自分を家族と再び一つにさせてくれる唯一の行動へと駆り立てられていくのを感じた。というのは、父親も母親も、そしてクララも救われていたし、自分だけが外側にいて、見えない壁で隔離されていたからだ。ヒーリー(Helye)で起きた、外部と隔絶し、自分自身の世界に閉じ込められたときのあの恐怖の震えが戻ってきたのだ。私は、桟橋の端でなされたマックファーソン氏の野外説教を、友だちに見られないように群衆の一番後ろの方に立って、聞き始めた。それから、ある暗くて寒い夜——どうしてそうなったかわからない——気づいてみると群衆の中にいて、説教師の後について、カークウォールの街をずっと通ってミッシンホールまで行進した。我々が狭い路地にさしかかったとき、そこに立っていた人たちの群れが振り向いて我々を睨みつけていた。我々は救われていない者だった。私はこの救われていない者をたいそう恐れていたので、安全のために群れの真ん中に逃げ込んだ。周囲の人々は、途方にくれた罪人であることにいささかきまり悪さを感じながらも、互いに気づかうことなく、前方をまっすぐみて並んで行進した。ついに我々はホールに到着した。暗い外を歩いた後だったので、漆喰を塗った壁や黄色いベンチはとても明るく目が眩むほどだった。まず信奉者たちが、次に普通の男女と子どもたちが、あたかも何も言わなくとも互いに理解し合っているかのように、互いに微笑みながらホールに入った。扉が閉ざされ、説教が始まった。説教のことは何一つ覚えていないので、おそらく聞いていなかったのだ。説教師が話していた言葉とは何の関係もない苛立ちに私は満たされていたのだ。周

囲の人々も、苦渋に満ちた期待を感じたかのように、またこれ以上救いを待ちきれないとでもいうように、突然すすり泣いたり、大きな声で叫んだりしていた。マックファーソン氏がやっと説教をやめ、キリストを受け入れる人は起立するようにと言ったとき、聴衆はすべて、私をも立ち上がらせながら、起立した。私は心からほっとして立ち上がる自分を感じた。しかし、聴衆の大多数の人々はすでにキリストを受け入れていた。困難な瞬間が来たのはその後だった。聴衆が再び着席すると、新たに回心した人は、ほんの一握りだったが、壇上に上がって、聴衆のすべてに見えるように壇上に設置された長い木製のベンチに、悔い改めの姿勢で跪くように言われたのである。私は躊躇した。知らない人々の前に身をさらすなんてぞっとしたが、小さな集団――男性、女性、少年、少女――が立ち上がったとき、私も立ち上がり、後についていって跪いた。説教師が我々が跪いているベンチのところに来て、我々一人ひとりに「あなたはあなた個人の救い主としてイエス・キリストを受け入れますか」と訊いた。そして、私の番がきて、「はい、受け入れます」と応えたとき、私の救いの印であり、自分からむりやり引き出したのではなく、心して述べたこれらの言葉は、圧倒的な確信をもたらしてくれるにちがいないと思った。ところがそうではなかった。それゆえ深く失望した。これらの言葉は単なる二語の言葉に過ぎなかったのだ。説教師は祈りを捧げるように言ったが、その祈りが思いつかなかったし、回心したばかりの自分が自分の言葉で神に語りかけるなんて図々しいと思った。私の側には、店で働いていた髪の毛が赤く眼鏡をかけた青年がいたが、彼は説教の間中たいそう目立つようにうなり声をあげ、また力を込めて叫んでいたので、周囲の人々は驚いてまた尊敬の眼差しをもって彼を見ていた。彼は、救われた者の世界で記録をつくるとすでに決意していたかのように、大きな声と早口で祈りを唱え出した。私も心が高ぶったが、彼のこの目立った行動にはいささか苛立ちを覚えた。それでも、彼を愛さなければならないと自分に言い聞かせ、この感情を抑えた。目がくらみながらも、顔に無意識の喜びの笑みを浮かべて、立ち上がり、みんなといっしょに席に戻った。会衆のすべての顔が一つの歓迎と驚きの母なる顔に溶け込んでいった。私は大きな愛の両腕の中へまっしぐらに歩いているのだと感じた。

家に帰ってから、母親に話をし、絶対の安心感をもって『レ・ミゼラブル』に戻っていった。『レ・ミゼラブル』は、これまで考えもしなかった意味をもつ、新しくて神聖な本のように思えた。しかし母親が通俗的な物語を私がとても熱心に読んでいるのを見たとき、疑惑の眼差しが彼女の顔をよぎった。彼女は立ち止まって一瞬考え、それから本を、次に私をちらっと見て、奇妙な笑みを浮かべた。母親は私の回心を疑っていると思った。それで私は深く傷ついた。

あの夜の私の経験は一体何だったのだろうか。しばらくして、私は確かに自分の中に変化を感じた。昨年来習慣となっていた粗野な考えや言葉は堪えられないものとなった。私は絶えず幸せを感じていた。それゆえ侮辱や嘲笑に対しても柔和に対応することも容易にできた。悪事がちょっとでも脳裏を掠めると、それが私の胸に突き刺さった。それでも、私は、難攻不落であるかのように、自分自身のある部分では影響を受けることはなかった。同時に、あと二週間もすればカークウォールを去るし、それゆえ私を知っている人の前で自分の回心が本物であることを証明する必要はないと幾度となく考え、ほっとしていた。グラスゴーでは、始めから救われた人たちとつき合うのだと自分に言い聞かせた。私の周囲にいる人たちはみな救われた人たちであろうからだ。時折、回心した新たな自分を恥じて、あの熱心な赤毛の店員のように高らかに新しい自分を公言するのではなく、友だちに自分を蔑んでみせることもあった。私はすでに救われた同年配のカークウォールの少年たちと友だちになっていて、これまでの仲間とはつき合わなくなっていた。救われた者のなかには学校で一番の乱暴者も何人かいたが、彼らももはや乱暴な言葉を使うことはできなかった。彼らの顔は神の恵みを受けて輝いていた。いわば浄化作用が我々に生じ、その年に貯まった毒物を洗い落としてくれたのだ。それは霊的というより自然な清掃であり、個人的というより共同的な経験であった。というのは、もしあの夜全聴衆が立たなければ、私も立たなかったのは確かだからだ。それを純粋に宗教的な回心だと主張するのはばかげていよう。私は自分が何をしているのかわからなかったし、罪とか救いの必要性に関して明確な知識ももっていなかった。ただ、これまでつき合っていた仲間から救われたかったし、また善良な人たちや父親、母親、それに姉といっしょにいたかっただけであった。それでも変化そのものは否定しようがなく、それにはびっくりした。私は変わろうとしたことはなかったが、まったく予想しないほど変わってしまった。だが、その変化は長続きしなかった。

父親と母親は姉と私の回心を喜んだが、定期的にこの地域を襲った信仰復興運動の効力に疑問を抱いていた。ずっと後になって、信仰復興運動の後には私生児の数がかなり増えたという話を聞いた覚えがある。母親がまだ若かった頃の信仰

復興運動では、人々が教会の中で卒倒し、床の上を転げ回っていたこともあったようだ。どうしてそのような熱狂的な行動が起こるのか私にはわからない。そうした行動が続いている間はある程度効果があるのかもしれない。そうした行動は人々のつまらない悩み事を忘れさせ、お互いに自分の心を開かせるのかもしれない。しかしその波が引いてしまうと、人々は再び私事に心を奪われ、愛を惜しむようになるのだ。こうした信仰復興運動は、キリスト教がこの島に到来するずっと以前に知られていた共同の熱狂的な騒ぎであった。そして、こうした騒ぎはしばらくの間は人々の心を浄化するが、宗教とは何の関係もなかったし、たいていの熱狂的な騒ぎと同じように、その後に残るのはただ恥じらいだけであった。

後にグラスゴーで、私は、望み通りに激しく回心する人々の中に放り込まれた。そして、この種の宗教に関わりをもたなくなる前に第二の怪しげな回心を経験したが、信仰復興運動の仕組みをかなり知るようになってからほどなくして、この運動に幻滅を感じるようになった。グラスゴーにいたとき、有名なトーリーとアレグザンダーによる信仰復興運動が展開されていた。敬虔なまたいとこが何度もいっしょに行ってくれと頼むので、しかたなく行った。集会は巨大なホールで行われた。すらりとしていて、身なりのきちんとした、やや禿げた青年のアレグザンダーは覚えやすい聖歌で気分を引き立てていた。

我々はシオンへと進んでいる、
美しい、美しいシオンへと、
我々はシオンへ向かって進んでいる、
神のあの美しい町へと。

こうして、アレグザンダーが前段を用意した後、体のがっしりした、白髪まじりで、一流のクラブに出入りする社交家のトーリー博士が立ち上がり、救いに関する機知に富んだ言葉を何発も繰り出した。そうすれば、人々を回心させる商売がうまくいくことがわかっていたのだ。救われた者にその場で起立を求める時が来た。私の周囲の人々はみな起立した。そして大変驚いたことに、そうする気はまったくなかったのに、気づいてみたら自分も起立していた。周囲の人たちがみんな起立しているのに、自分だけ座ったままでいるのはとても難しかった。もちろん、悔い改めの姿勢はとらなかったが、私が起立したことはまたいとこをたいそう喜ばせた。彼はおそらく魂を勝ち得たと心の中で思ったであろう。

私もしばらく通っていたが、グラスゴーのバプティスト教会に通っていた友人がついに復興運動に幻滅を感じさせてくれた。彼自身もこの運動に参加していたのだが、ある夜、集会ののち、牧師に回心者は何人かと訊かれたので、彼は一言、「五人」と言った。「何、たったの五人」と牧師は応えた。それから、彼は「某氏、忘れてはいけないと思います。五人というのは神様の目からみたら貴重だということを」と言い返し、怒ってその場を立ち去ってしまった。その後、彼はこれ以上その運動に関わることをいっさい拒否した。

第　三　章　　グラスゴー

我々のグラスゴー行きはしばらく遅れた。父親がこの機会を記念して顎髭の手入れをすることを決意し、あまり短くしすぎて風邪を引いてしまったのだ。我々は冬の最中、暗い風の強い日に、ストラムネスから出航した。ジミーとジョニーの二人の兄がリースの埠頭まで迎いに来てくれた。我々が到着したときには暗くなっていて、
大きな電球の青みがかった明かりがぎらぎらと埠頭を照らしていた。駅には汚い列車が停車していた。私は学校の教科書の挿絵でしか列車をみたことがなかったが、ピカピカ光っていて真新しいものと思っていた。都会的な服を身につけた二人の兄は妙に有能な人たちで、この未知の世界に精通しているように見えた。

最初の夜、我々はエディンバラに宿泊したが、私は兄のウィリーのところに泊まったにちがいない。兄といっしょにきれいな石畳の街路を歩いたのを覚えているからである。その街路には階段によって地下室へと通じる門扉が数えきれないほど立ち並んでいた。女中たちはその階段をせっせと磨いていた。我々は緑の丘に来たが、周りには多くの記念碑が立っていた。それから、しばらくして、薄暗い美術館に行った。戸口近くに、女性の裸体の彫像があった。二人のぼろをまとった汚れた少年が、互いにひじをつつき合いながら、また彫像の片方の乳房についていた黒い親指の跡を見つめ、くすくす笑いながら、その彫像の前に立っていた。これまでふたりのような少年を見たことがなかった。我々は暗くて輝いている絵を見ながら陳列室を歩いた。グラスゴーに行くまで、その後のことは何も覚えていない。

ジミーはクロスヒルにフラットを我々のために借りてくれていた。クロスヒルはクイーンズ・パークに近い見苦しくない郊外だった。ある理由で我々はこの最初の家には長くいなかった。まもなく、第二の家に移り、そして第三の家に移った。私は数か月の間、友だちもなく、グラスゴーに慣れようとして、あちこち歩き回った。父親も見る

もの聞くものすべてに興味をもち、見聞を広めようと見知らぬ人と長い時間話し込んでいた。オークニーで生涯を過ごしてきた父親にとって、ここでの最も簡単なことにさえ慣れるのは容易でなかった。ブーやガースでは夜ドアに鍵をかけるなど考えたことはなかったし、昼間でも、少なくとも夏はドアはいつも開け放しであった。今では彼は階段を上がりきったところにある狭いフラットに閉じ込められていた。ドアは、閉めると、自動的に鍵がかかった。フラットを出入りするときはいつもドアを閉めなければならなかったが、父親はこれを覚えるのにかなり時間がかかった。乞食は絶えずベルを鳴らしたが、乞食を中に入れて食べ物を与えたりせずに、目の前ですぐにドアをピシャリと閉めなければならないのを知ったのは何週間も後のことだった。絶えず階段を上ることは父親の心臓によくなかったし、街をとぼとぼと歩くだけで疲れた。そして、街の散策から帰ってくると、疲労困憊してしばらくベッドで休まなければならなかった。彼は海や野原を一目みたいと思ったが、見ることなく死んでしまった。ある夜、キッチンベッドに横になりながら快活に話をした後――ジミーの友だちも数人いた――突然立ち上がり、そして倒れた。私は別な部屋で寝ていたが、クララが入ってきて、父親が死んだと言った。まだ半分寝ぼけていたが、「そんなのうそだろ！」と怒って叫んだ。それから、わっと泣き出した。

これはグラスゴーに来ておおよそ一年経った頃だったが、私は週四シリング二ペンスで法律事務所の雑用係として働いていた。心地よいが、退屈な事務所で、手紙をコピーしたり、手紙に住所を書き、切手を貼って出したり、さらに小口現金出納帳をつけたりしながら、朝九時から夕方五時まで働いた。そこでは疲労困憊した。初めて学校に行ったときのように、監禁状態に陥りつつあると感じ、もう一度時計の針を自分の意思で動かし始めた。事務所の職員はオークニー訛りのゆえに私をからかった。それで、私はこれまで以上に黙りこくるようになってしまった。事務所の仕事については何もわからなかったし、今でもわからない。

給料から数ペンスを出して、近所の乳製品の売店でランチを買わなければならなかった。そうすると残りはあまり多くはなかった。それゆえ、経済と健康のために（町では運動が必要だと兄たちは言ってくれた）、毎日、仕事の行き帰りにスラム街を通った。グラスゴーのサウス・サイドから町へ行くにはスラム街を通って行くしかなかった。そこを通って行くと、自分が堕落していくような気持ちに満たされた。崩れ落ちそうな家々、歪んだ顔、通りがかりにふと耳にする猥褻な言葉、汚染と腐敗の昔ながらの鼻について離れない悪臭、横柄な女性、貧相な男性、性悪な子どもたちなどにたじろぎ、仕舞いにはわけもなく、やたらと気落ちするばかりであった。これまではごく普通の人たちしか見たことがなかった。毎日すれ違う顔のいくつかには、奇想天外な想像力でしか書けないようなことが書かれているように思われた。それを読む気にはなれなかったが、すぐにそうした顔を見ないですまされるようになった。しばらくすると、産業都市に住んでいるすべての人たちのように、私はこうしたことにも慣れた。家から仕事場へ行くごく普通の道であるかのように、スラム街を歩いた。意識的にこの道を歩くようにしていたが、疲れていたり、気分がすぐれないときにエグリントン・ストリートやクラウン・ストリートを通ると、危険なことに、二度と這い上がれないかもしれない場所の地底に深く沈み込んでいくような気持ちに度々襲われた。はるか頭上には、アクセスできないが、きれいで立派な街道が走っているというのに。そして音のない震えが私をゆさぶった。不安神経症の前兆であった。こうした恐怖心がいつ襲ってきても不思議ではなかった。それからは、まともな家に住んではいたものの、周囲のいたるところにスラム街があるように思えたし、沈んだら永遠に這い上がれないような広大な沼地が周囲に広がっているように思えて仕方がなかった。

私はまもなく自由な時間があるときは周辺の田舎へ逃げ込む習慣を身につけたが、そこでもまた目に見えない沼地が広がっているかのように、野原でさえ病気で枯れているように思われた。田舎にいく一番の近道は小さな炭坑の村を通っていた。村では老人たちがいつも家の端にしゃがんでいた。そして地面は炭塵で被われていた。そこから左に進むと、細かい石炭殻を敷きつめた小道が立坑の向こうまで続いていた。そして、その小道の側には汚い水溜りがあり、黄色い顔をした子どもたちが水をまわりに飛び散らして遊んでいた。水溜りのまわりには、ずたずたに裂かれ、白癬病に罹った木々がむさ苦しい森の静けさの中に立っていた。草は煙と炭塵で薄汚れていた。流れの遅い小川は青みがかった黒色をしていた。右手の方は、一本の坂道がハンドレッド・エーカー・ダイクの街道へと通じており、そのダイクに沿って疥癬病に罹ったサンザシが生い茂っていた。ここの草は汚れておらず青々としていたが、目に入るものといったら、黒ずんだ野原、煙突、炭坑の薄黒い塁壁だけだった。しかし、南の方はそうではなく、キャスカート（Cathcart）というきれいな小さな町が広がっていた。これらの道は

私の心の中では不幸と深く結びついていたので、グラスゴーのサウス・サイドを去った後、再びそこを訪ねることなどとてもできるものではなかった。

グラスゴーでの最初の数年はとても惨めであった。堕落していくという気持ちがずっと続き、ますます激しくなっていった。何で自分がこんなに不幸なのか知らなかったし、自分が混乱状態に陥っていたことも知らなかった。オークニーでは、おもに自分たちが育てたもので十分快適に生活してきたが、ここグラスゴーでは何もかもお金を払って買わなければならなかった。確かに、お金や食べ物、衣服、暖、それに暖をとる設備などはたくさんあったが、それだけだった。こうした新しい環境に母親は苦しみ当惑したが、我々一人ひとりも、こうした環境ゆえに、これまで経験したことのない逼迫感に襲われた。兄たちはすでに、オークニーにあった協力ではなく、競争という新しい社会的原則を理解していた。我々も直ぐにこれを理解するようになったが、父親と母親は決して理解することはなかった。我々は幾分上向いたのではないかと想像していたが、知らないうちに別の階級に沈下していた。というのは、もしジミーとジョニーが職を失えば、残るのはわずかな銀行預金残高だけとなるからである。この預金残高は、農場のように反応もよくないし、また融通も利かず、ただ減っていくだけなのである。いわば、我々は、当時そういう名称を聞いたことはなかったが、プロレタリアの一員だったのだ。幸い、兄たちが仕事を続けていたので、どん底の生活を経験する必要はなかったが、心のどこかでそれを意識していた。昔の安堵感がなくなってしまったのだ。

グラスゴーでの最初の数年は忌々しいほど惨めで、受け継いできた美徳の無意味な浪費であった。それゆえ、今でも深い悲しみと怒りなしではこの数年について書くことはできない。父親と母親は年をとっていたし、私はといえば、若すぎたので、途方にくれた。兄や姉たちは、意識的にまた慎重に順応できる年齢に達していたので、変化にうまく立ち向かっていた。しかし、兄のウィリーだけは、我々は知らなかったが、病に冒されていた。週末彼は我々のところに滞在するために度々エディンバラからやってきては、私をいろいろな所に連れていってくれた。我々は本に対する共通の趣味から友情で結ばれていた。動物園とか、パントマイム、後になって足しげく通うようになったミッチェル図書館(スコットランド最大の公開図書館で、バーンズ関係のバーンズ・コレクションを含む稀覯本を数多く所有している=訳者註)などに連れて行ってくれた。そして、自助で成り立っていると彼が言っていたこの新しい社会的法則を私に説明しようとした。彼の言葉は厳しかった。彼はすでに自分が不治の病に冒されているのではないかと考えていたのかもしれない。我々に会いに来るときはいつも疲れていて元気がなかった。それでも法律を勉強し続けていて、テキストを読みながら夕方を過ごしていた。それからある週末にやってきて再び帰っていくことはなかった。彼の事務所は彼に病気休暇を与えてくれたのだ。医者は肺結核に罹っていると彼に言った。それは真夏のことだった。まもなく私は二週間の休暇が与えられた。ジミーとジョニーが休暇をとったのはずっと後のことだった。ウィリーには田舎の空気が必要であったが、彼ひとりでは田舎に行かせられなかった。ウィリーとは堅い友情で結ばれていたので、私と二人で休日を過ごすことになった。カンブレイ島のミルポートで宿をとった。ウィリーの病気はもうかなり進んでいたにちがいなかった。クライド川を下って、宿泊する家に到着すると、女主人の太った娘が居間に入って来て、ウィリーを見るや、間抜けな哀れみの気持ちから両手を挙げ、「哀れな魂よ!何て痩せているのかしら!」と大声で叫んだ。宿泊初日のこの言葉は彼の胸にぐさりと刺さり、まるで死の宣告のようだった。ミンストレルショー(黒人に扮した白人の芸人一座の演じる黒人の歌、踊り、滑稽な掛け合いなどから成るショー=訳者註)の芸人たちもおり、また荒涼とした散歩道もいくつかあった。絶えず海に浸っている人たちもいた。しかし、こうした光景は我々の埒外にあった。ただちらっと遠く離れた所から見ていたに過ぎなかった。ウィリーは自分の中にますます閉じこもるようになったが、外部から希望の言葉をしきりに待っていた。にもかかわらず、私がそうした言葉を発すると、怒り出した。彼に何を言ったらよいのかわからなかった。周囲のものを何も見ずに小道を歩いていても、ほとんど話しかけなかった。我々ふたりはあの目に見えない、穏やかな不倶戴天の敵が我々の力の及ばぬところで策動していることに思いをめぐらしていた。ウィリーの顔は、生きながらにして死の宣告を受けた人の顔になっていた。彼は、庭の花々、店のショーウィンドに並べられた果実、海の浅瀬をバシャバシャと歩いている子どもたち、それに陽光(彼には効果があるはずなのだが)など、健康的な輝きを放っているものはすべて嫌っているかのようだった。時折、希望が突然湧いてきたかのように、彼は掌でわずかな海水をすくい、申し分けなさそうに飲み込んだ。海水が肺結核の治療薬になるとどこかで読んで知っていたのだ。だが、数分もすると、彼の絶望はまた戻ってきた。それからもの凄い苛立ちが彼を捉えたが、それは、決して起こ

ることがないと彼も知っていた快方のしるしや奇跡を求める切なる思いであった。まだ二週間が経っていなかったが、彼はこれ以上ミルポートに耐えられなくなった。荒天の日に我々は蒸気船に乗って出航した。ウィリーは気分が優れず、椅子に横になりながら、もう死にそうだと大声で叫んだ。私はどうすることもできず彼の側に立っていた。船を降り、列車に乗ったときは、彼は大分気分がよくなり始めていた。それとともに希望が戻ってきて、船上で言った言葉については何も言うなといった。我々はやっと家に到着し、台所に入るなり、私は不安そうな作り笑いをしたが、その笑いを顔からぬぐい去ることはできなかった。隣の人が座って母親に話しかけていたが、母親はウィリーの方に目をやり、それから私の作り笑いに目を移したが、驚いて私の方をじっと見ていた。当時私は十六歳だった。

その後、ウィリーは家を離れることはなかった。まもなく寝たきりになった。ひげを剃る力もなくなったので、彼のあごひげは伸び放題だった。若くて柔らかい巻き毛のあごひげだったので、ひときわ目立っていた。寝たきりになってからは体力が急に弱っていった。死ぬ数日前、ウィリーは母親に神と和解したと語った。同時に数年前から何か月もの間毎晩、神に受け入れられる保証が得られるよう祈ったが、沈黙以外の慰めは何もなかったとも語った。彼は自分の孤独な苦闘を誰にも語らなかったが、とうとうその苦闘もあきらめてしまい、その後はどうでもいいという気持ちになっていった。そして、ウィリーが祈った神に受け入れられる保証は、彼が予期しなかったときに、自然にやってきた。

父親が死んで一年も経たないうちにウィリーは死んだ。今のところわが家族は、揺さぶられながらも、さらなる危険に晒されることはないようだった。しかし、病気が依然としてわが家を被っていた。兄のジミーとジョニーは今や新しい環境に慣れて健康だったが、クララと私はいつも具合が悪かった。

四シリング二ペンスに満足できなくて、レンフルーの技術系の会社に週給八シリングの職を得た。朝八時の電車に乗って行かなければならなかった。そして帰りは夕方七時以降だった。私の仕事はきつかった。所属の部長は無愛想で無神経な男だったが、私を仕事がのろいと言って絶えずどなりつけた。私は病気になり数週間で失職した。私の健康を心配した母親は、しばらく私を家においてくれた。恩知らずにも、私はその時間をゴーバルズ（Gorbals）（グラスゴーの郊外にある一街区で、長年英国で最もひどいスラム街であった＝訳者註）の薄暗い閲覧室で、『ザ・コンテンポラリー』（*The Contemporary*）や『ザ・ナインティーンス・センチュリー』（*The Nineteenth Century*）、さらに『ザ・フォートナイトリー』（*The Fortnightly*）などの様々な学術的な評論雑誌を熟読しながら過ごした。これらの雑誌は毎日閲覧室が閉まる頃には、半ば判読できない状態になっていた。閲覧室は温かく、汗臭くて、貧しい、薄汚れた人々が大勢押し掛けていた。照明はよくなかったが、雑誌は手垢がつき、ぼろぼろになっていた。そしてこれら入浴しない人々の汗は、まるで惨めさがしみ込んでいるかのように、紙にしみ込んでいた。なぜあの閲覧室を選んだかというと、仕事場に歩いて通っているうちに身につけた惨めさに引かれる気持ちが私にしみ込んでいたからである。あの閲覧室で読んだものといえば、同時代の有名な著作家たちが精選したイギリスの散文集のシリーズくらいで、それ以外には何も覚えていない。私はこれらの散文集を装丁本にされた『ザ・フォートナイトリー・レビュー』（*The Fortnightly Review*）の中に発見した。

私は惨めさに引きつけられたが、同時に土曜日の午後のフットボールの試合にも引きつけられた。クロスヒルは見苦しくない郊外だったが、その周辺には空き地や草が一本も生えていない荒れ地が点在していた。それゆえ、雨が降らないときは溶岩のように堅く、雨のときは泥だらけになった。こうした空き地で、サウス・サイドのスラム街のチームが毎週土曜日の午後、優れた技と野蛮な行為の試合が行われた。反則は当たり前で、各試合は入り乱れた争いと化し、ボールそのものは試合とは何の関係もない目的への単なる手段に過ぎなかった。チームによってはサポーターにボクサーを擁していた。こうした人たちはタッチライン上に憤然として立ち、相手の選手に脅迫めいた言葉を浴びせかけた。こうした試合の一つをはじめて見たのは、グラスゴーに来てから間もない頃だった。灰色の霧が地面を覆い、空に浮いたクラゲのような小さい赤トマト色の太陽は、霧が厚くなったり、薄くなったりするのに応じて、見え隠れした。後になって知ったことだが、クイーンズ・パークの運動公園ではもっと品のあるフットボールチームが試合をしていた。私はそちらの試合を見るようになった。ずっと後になって、土曜日に六ペンスを使えるくらい稼げるようになったとき、クイーンズ・パーク・フットボール・クラブの試合を見に行ったが、最低の地獄でこんちくしょうとばかりボールを蹴るのを見て、うす汚い魅惑を感じた。

数週間家にいてから、出版社の雑用係の仕事に就いた。ここではじめて友だちができた。この会社には私と同じ年齢の少年が数人いた。そこは思

いやりのある、格式ばらない、気のおけないオフィスで、女性が多く、男性はわずかであった。他の課へ使い走りをしているうちに、たいていは女性だったが、数人の人と知り合いになった。彼女たちは私に関心を示し、私に本を貸してくれたりした。私は片腕しかない無神論者の出退勤時刻記録係と半ば敵対的な友情を結び、彼と延々と宗教論争をした。そこではじめて社会主義について知った。私は古典的な議論で武装し応戦した。その頃、ある人に『グレイト・ソート』(*Great Thought*)という週刊紙を取ることを勧められた。この週刊紙は高級だが、曖昧な非妥協的精神に溢れ、復興キリスト教の理想と偉大な文学を結合させようとしていた。それにはラスキン、カーライル、ブラウニング、その他啓蒙的なヴィクトリア時代の著作家たちの「諸相」を論じた論文とか、彼らの著作やマルクス・アウレリウス(ローマ皇帝、一二一—一八〇、在位一六一—一八〇、『自省録』が有名=訳者註)やエピクテートス(六〇?—一二〇、一三八?ギリシアのストア派の哲学者、弟子のアリアノス(九五—一八〇)が筆録した『語録』*Diatribai*と『提要』*Enkheiridion*がある=訳者註)の著作からの抜粋、主に「思想」が数多く掲載されていた。この週刊紙はしばらくの間私の文学に対する姿勢に影響を与えた。「思想」と「思想家」に私は傾倒した。そして文学に自分の品格を高めてくれるような道徳的な教訓を要求した。特に「自己修養」という面で、品格を論じた「思想」が数多く載っていた。自己修養という点では、読者はキリストの教えとサミュエル・スマイルズ(S. Smiles 一八一二—一九〇四、スコットランド、イーストロジアンのハディントン生まれ。伝記作者、社会改革家。日本では自己啓発書の『自助論』(*Self-Help*)が特に有名=訳者註)の教えのバランスをとるように勧められた。抜粋はほとんど啓蒙的なものだったが、その中には詩はほとんどなかった。それゆえ、散文以外に何も読まなかった。それもほとんどはヴィクトリア時代の散文だった。これらすべての精神的高潔さと美に対する口先だけの称賛の背後には、バプティスト派、メソジスト派、プリマス同胞教会派の信徒たちが控えていた。こうした著名人たちは私の心を不安にした。というのは、彼らの信仰と彼らが明らかに是認しているこれらの「思想」が一致していないことをすでに感じとっていたからだ。それでもこの疑念に決着をつけなかった。信仰復興運動に巻き込まれていたからである。ウィリーの死後しばらくの間、バプティスト教会の礼拝堂での会合に出席し、再度心にもない回心を経験した。このときは、最初の回心がもたらした晴れやかな感情を経験しなかった。キリストを崇拝するにも、そこには思春期特有の不純さがあった。キリストは私にとっては「慰め主」(Comforter。聖霊の呼び名のひとつで、誘惑や苦難のときに信徒たちを力づける聖霊の役割を強調した呼び名=訳者註)のようであった。そして、

> 私はイエスの声が「私の所にきて休みなさい」と言うのを聞いた。

とひとり鼻歌を歌うと、時折急に涙が溢れてきた。私は『新約聖書』のポケット版をもち歩き、それをいつも読み、自己犠牲を実践しようと努め、知っている人に何の役にも立たない、はた迷惑な奉仕をいつもしていた。他の雑用係の中にキリスト教徒がひとりかふたりいたが、彼らは私の言葉や態度の堅苦しさを非難するどころか、却って推奨してくれた。そしてローマ人の迫害を受けた初期キリスト教徒と彼らの柔和さを扱った出来損ないの小説が私の堕落を終わらせてくれた。私はいつでもライオンに飲み込まれようとする殉教者の許しの微笑みを浮かべて歩き回っていた。こうしたことがすべて無に帰したのは、自分を救ってくれた人を知的な面で軽蔑していたからである。彼は髪が黒く、頬が鉄色のアルスターのセールスマンで、聴衆に強い印象を与えるため、「蒼穹」といった陳腐な文句を必要以上に使うのを好んだ。まったくの見当違いだったが、彼をいかがわしい人物と疑ったのだ。

私はこの間、自分では気づかなかったが、病気に悩まされていた。間もなく、頸部の腺が見苦しいほど腫れ上がり、私を苦しめ始めた。家族のかかりつけの医者に行ったが、その医者は老齢の気むずかしい、愚かな人で、しばらくその腺を電気治療したが、何の効果もなく、時々、「これは卵みたいだ。これは卵みたいだ」と言っていた。ついにヴィクトリア診療所に行かなければならなくなった。その診療所ではクロロフォルムで麻酔をかけ、頸部を切開して、毒を除去してくれた。その後数週間は、傷口はこすると痛かったが、その後は塞がった。職は失ったが、医者には屋外の仕事を見つけるようにと言われた。

ヴィクトリア診療所に通っている間、何週間も何か月もたくさん読書をした。『チェンバーズ英文学百科事典(*Chambers's Cycropaedia of English Literature*)』(スコットランドの出版社・著述家 R. チェンバーズ 一八〇二—七一 の監修による二巻の辞典=訳者註)の分冊を予約購読するために週六ペンスを何とか確保した。私の予約購読はロマン主義運動から始まった。さまざまな作家に関する、スウィンバーンとかウォッツ-ダントン(W.T. Watts-Dunton 一八三二—一九一四、英国の批評家、小説家、詩人。チェンバーズの英文学百科事典に、The Renascence of Wonder in Poetry を寄稿している=訳者

註）とか、ゴス(Sir Edmund W. Gosse 一八四九―一九二八、英国の批評家、伝記作者、小説家、北欧文学の翻訳者＝訳者註)といった有名な批評家の評論や詩、散文の抜粋が豊富に載っていた。ワーズワースからスウィンバーン、モリスに至る時代についてはかなりよく知っていた。出版社で働いていたとき、当時一シリング六ペンスで買えたスコットライブラリー叢書を一、二冊買えるくらいのお金を貯めていたからだ。この叢書の中にはパスカルの『パンセ』やレッシング（G.E. Lessing 一七二九―八一、 ドイツの批評家、劇作家＝訳者註）の『ラオコーン』の英訳が入っていた。これらの書物はあるべき「思想家」の新たな基準を示してくれた。またシェイクスピアやミルトンの作品、エマソンのエッセイ、『ジェーン・エア』（*Jane Eyre*）、それに六ペニー版のハーディやメレディスの小説をいくつか手に入れた。『チェンバーズ英文学百科事典』を読んで、再び詩に戻っていった。『ひとり麦刈る乙女』（*The Solitary Reaper*）、『小夜啼き鳥に寄せるうた』（*Ode to a Nightingale*）、『西風に寄せるうた』（*Ode to the West Wind*）、『安逸の人々』（*Lotos-Eaters*）、それに『カリドンのアタランタ』（*Atalanta in Calydon*）のコーラスなどに魅せられた。このように新しい詩がどっと押し寄せてきたので、私の宗教的夢想は払拭された。

屋外の仕事を捜したが、しばらくは見つからなかった。ジミーの友人がお抱え運転手を知っていた。彼はエアシャーにある大きな屋敷で働いていて、たまたま車を洗ったり、雑用をしてくれるアシスタントを求めていた。アシスタントは、時間的余裕があれば、車の運転を習うことができた。彼の雇い主は、ケルヴィンサイドに大きな屋敷をもつグラスゴーの実業家だった。夕方そこを訪ねるようにいわれた。M氏は私を温かく迎えてくれた。彼は気さくで、気取らない人だったが、私と同様、我々との出会いに困惑している様子だった。召使いたちを厚遇していると私に言った後、彼は「ノブレス・オブリジェだからね、ノブレス・オブリジェだよ」とつぶやいた。私は彼にどう話しかけたらよいかわからなかった。彼は確かに心の優しい人だったが、彼を「サー」と呼ぶ気にはなれなかった。「ノブレス・オブリジェ」を求めているようにも思われなかった。彼の話に耳を傾けていると、「ノブレス」ではなく、「リシェス」（富）のほうが適切ではないかと考えざるを得なかった。「サー」に関しては、この言葉を使うのはおべっか使いだと教えられて育ったからだ。オークニーでは、たとえお金持ちでも、身分の高い人でも、権力のある人でも、人と話をするとき、「サー」をつけて話すのは威厳を損なう、みっともないことだと考えられていた。この自尊心はイングランド人の読者にはばかばかしくみえるかもしれないが、そこにはスコットランド人気質の他の美徳と密接に結びついた美徳があるのだ。それはスコットランドの小作人が王室の方々の前でも脱帽を拒否する特質なのだ。こうしたことは王室の方々のスコトランド訪問中にもときどき起こった。グラスゴーに来てから、帽子を脱ぐ習慣を身につけるのはなかなか難しかった。というのは、オークニーでは、相手が誰であろうと、男性、女性、牧師、先生、地主、あるいは王子であろうと、帽子を脱いだりはしないからである。ある日、ヨーク公（後のジョージ五世王）が褐色の馬に跨って静かなカークウォールの街を通っているところにたまたま出くわしたことがあった。ヨーク公が副艦長をつとめるチャンネル・フリート艦でオークニーに来たのである。私は他の少年たちの群れの中で、尊敬の念に満ちた好奇心をもってヨーク公をじっと見ていたが、我々の中に帽子を脱ぐなどと考える者は誰もいなかった。これは尊敬の念がないからではなく、帽子を脱ぐといった考えが浮かばなかったからに過ぎない。

エアシャーの屋敷で過ごした数か月の間、こうした良心のとがめに苦しむことはあまりなかった。雇い主には一度か二度しか合わなかったが、彼はほんとうに親切で、打ち解けた人だった。屋敷内には樹木が茂った広々とした庭園があった。私が寝泊まりしていた馬屋の建物は屋敷からかなり離れていた。運転手の見習いとしては失格だった。車を洗い、セーム皮で磨いたりするのは好きでなかったからだ。運転手が留守の時は、何もすることがないので、ぼんやりと楽しい気分で周囲をぶらぶらしたり、『チェンバーズ英文学百科事典』をじっくり読んだりしていた。こういう日が長く続くこともあった。こういうときの自分の時間はすべてロセッティとスウィンバーンに当てられた。

> 愛と死は、恐怖と神秘が守っている生命の
> 社の門の下で、美が王位に就くのをみた。
> そして美のじっと見つめる眼差しに畏怖の
> 念を覚えたが、ただ息を吸い込むようにそれ
> を吸い込んだ。

これを読む度に、トウヒやカラマツの森、馬屋の建物の石敷きの中庭、ブラシで馬の手入れをするときの太った御者の口笛（この屋敷には馬車があった）、オイルと皮革の匂いがする馬具庫、泥よけの泥を取り除くホースから噴出する水、それにびしょびしょのセーム皮のいやな臭いなどを思い出すし、また、春の猟犬が雑多な風景の中をかけ抜ける光景や、背が高くハンサムで、黒い服を

着た聖職者でもある執事が慈悲の心をもって猟犬の間を、聡明な召使い、可愛い召使い、お高くとまった凛々しい召使い、悲しそうな表情をした老練な召使いたちを従えて歩く光景などを思い出すのである。

小さな橋を渡った先の門の近くに、家の前に花が細長く華やかに植え込まれていた村があった。当時、ロセッティやモリスを読んでいたので、このような村はラファエル前派の風景の一部のように思えた。しかし、それは願望夢想の力によるものだった。というのは、その後その村に行ってみると、そこは荒れ果てた、汚らしい場所だったし、境界をなしていたきれいな花も雑草と化していたからだ。その最初の冬、私は村の集会所でダンスを習った。トライアンフ、ペトロネラ、ザ・フラワーズ・オブ・エディンバラ、ローリー・オモア、カドリール、ランサーズカドリール、それにワルツなどである。長い頬髭をはやした、小柄できびきびした男性が我々にステップの訓練をしてくれた。若い男女(近所の農家の子供たちや作男たち)の間にはうわついた戯れの気分が漲っていた。しかし、ダンスの先生は男女間の礼儀作法をきちんと守るようにさせ、洗練された作法を教えようとした。我々はおどけ者のようにふざけて服従した。私はグラスゴーに来てから三年しか経っていなかったが、これらの田舎の若者たちに都会的なところがあるのを感じた。これらの若者たちはオークニーの田舎の若者たちとはちっとも似ていないのである。彼らはイエーツ(W.B. Yeats 一八六五—一九三九、アイルランドの詩人、劇作家=訳者註)が軽蔑的に「人生の根本的事実」と呼んだものについて私などよりもはるかに多くのことを知っていた。私は他の多くのことを学ぶのに精一杯で、「人生」について学ぶ時間がなかった。彼らはみな現実主義的で、ラブレーばりの奔放で粗野なユーモアに溢れた人たちであり、近所のどの女の子が貞節で、どの子がそうでないかをよく知っていた。彼らはまた知的な面ではかなり保守的だが、人生との実際の関わりという点では私よりもはるかに禁欲的ではなかった。私は色々な面でショックを受け、ロセッティの詩に寄りすがったが、いつの間にかショックを克服し、友だちもたやすくできた。その頃は幸せで心も安らいでいた。健康もたちまち回復し、女の子とはじめて数回戯れの付き合いをしたが、この年齢によくあるように、戯れの恋愛を越えたところまでいき、そこから多くの喜びと失望を経験した。自分がお抱え運転手に向いていないことは明らかだった。仕事は、いくらやっても上手くいかず、車は要求されているような完璧な姿になることはなかった。やめたほうがいいと言われた。

しばらくの間、私は母親の手紙に苦しんだ。兄のジョニーが原因不明の頭痛に苦しんでいると言って来たのだ。数か月前、ジョニーは市街電車から転落して、気絶してしまったのだ。体は丈夫であったし、殴打にも慣れていたので——グラスゴーに来てからしばらくしてレスリングを始めていた——彼は事故を軽くみて、医者に行くのを拒否していた。私が家に帰って来たのは春の終わり頃だった。ジョニーは見た目には病んでいるようには見えなかったが、何か変わったようにみえた。彼の顔は、普段は屈託のない顔なのだが、頭の中の何ものかに耳を澄ましているかのように、一点をじっと見つめているようだった。母親と兄のジミーはジョニーのことが心配だった。ウィリーが家に帰ってきた後のあの恐怖が再びわが家を襲ったのだ。ジョニーは肉体的にはこれまで通り丈夫そうにみえたが、依然として警戒怠りない目をしていた。

家に帰ってまもなく、週十四シリングでビールの瓶詰め工場の見習い事務員の職に就いた。そしてついに自分も家族を支える手助けができると思った。そこは楽しくて気のおけない職場だった。またいくらか責任を負っていたので、自分を囚われの身と感じることはなかった。だがジョニーの頭痛がいつも気がかりだった。夕方、目にするものが怖くてなかなか家に帰れなかった。ジョニーが通っていた医者たちは様々な薬を彼にくれたが、彼が何の病気にかかっているのかわかっていないようだった。とうとう、医者の一人がヴィクトリア診療所に行って診てもらうことを勧めた。これはジョニーが仕事をやめることを意味した。

ジョニーが診療所へ行ってから、不安ながらも、家は落ち着きを取り戻した。数週間後、ジョニーは帰宅したが、ずいぶん太っていた。頭痛にはそれほど苦しんでいなかったようだが、益々ものをじっと見つめるようになった。他の人には聞き取れない小さな時計があたかも彼の頭の中ではチクタクと時を刻んでいるかのようだった。その時、ジミーはジョニーが脳に腫瘍ができていて回復できないことをすでに知っていたのではないかという気がするが、そのことを胸に納めていた。母親がそれに耐えられなかっただろうからだ。診療所の医者はジョニーに散歩を勧めた。そして夕暮れにジミーと私は交代でジョニーを散歩に連れ出した。すばらしい夏で、毎日夕方は静かで光輝いていた。病魔はジョニーの脚を冒し始めた。激しく投げ出された脚は、再び地面に戻るまでに一瞬躊躇し、空中で揺れるのである。市街電車の線路にさしかかったときなど、彼は危険な国での探検隊のリーダーでもあるかのように、左右を注意深くみて、それから注意深く横断した。また

度々クイーンズ・パークの運動場に行き、フットボールやクリケットの試合をみたが、試合をみている少しの間は、自分の病気のことを忘れているようだった。しかし、その後、何の屈託もなく走り回っている若者たちのところを通り過ぎようとすると、まるではじめて気づいたかのように、自分が病人であることに突然気づくのであった。ジョニーは行き交う人たちに目を向けなかったが、私もジョニーと一心同体であり、面目にかけて彼と同じ行動をとろうとしたので、目を向けなかった。我々二人は、夏の夕暮れ、楽しそうな混雑した街をまるで修道士のように超然とそして冷然と歩いた。

夏が過ぎてゆくにつれて、ジョニーの病気は一層悪化していった。病魔の攻撃の手は、我々の理解や能力を超えた力が早まることも遅れることもなく恐ろしい手術を彼に施しているかのように、着実に強まっていった。それは客観的な過程の紛う方ない到達点のようだった。苦しみは極に達し、ジョニーは死を懇願する始末であった。痛みは考えられないほど数学的な加速度で増し続けていった。こういう状態が秋の間中続いた。我々はもう見込みがないことを知っていた。ジョニーと共に家にいた母親とクララも幽霊のように痩せ細っていった。専門医に診てもらったが、打つ手は何もないというばかりであった。そしてついに、その年の冬、終わりが来た。後に、家が再び落ち着きを取り戻し、ジョニーが棺に納まったとき、彼の顔を最後にみようとよろい戸の閉まった部屋に入った。私が始めてみた死に顔はジョニーの顔であった。その顔は何か月もの間痛みで歪められ、決して安らぐことはなかった。今はもう顔の皺は消えていた。彼は若くてはるか遠くにいるようにみえた。そしてこれまで考えたこともない孤独の中に独りいるようにみえた。架台に置かれた棺は、その部屋にあったのだが、ふわりと浮いて、最も遠い星よりももっと寂しくて遠い未知の世界にどんどんと入っていくようにみえた。それは深い瞬間的な印象だったが、それによって私は恐怖と平安に満たされた。平安といっても、それはたちまち消滅してしまい、保持することも受け入れることもできなかったのだが。私の心は頑としてそうした完成を受けつけなかった。しかし、ジョニーの顔と彼の顔についに訪れた平安をみとどけることができて嬉しく思った。

秋の間中、毎晩ジョニーがよくなるように祈った。苦痛が増し、ジョニーも苦痛がまるで入念な職人のように細工を施すただの物質と化してしまったので、祈る意味もなくなったように思えた。もし神が存在するなら、神は聞く耳をもたず、冷淡だと自分に言い聞かせた。もしジョニーが、激しい苦痛の後、回復し、その苦痛によって浄化され新しい人間となったならば、その苦痛には意味があったであろう。だが、もし彼がとにかく死ななければならないとしたら、あの非情でぬかりのない拷問には一体どんな意味があるのだろうかと、毎夜、自問した。その拷問は彼の身体、精神、霊魂を順々に破壊し、彼を完璧に打ち倒し、彼を泣き叫ぶ子どもよりも始末の悪い状態へと零落させ、あげくの果てに、彼はこの二分の一の生存を、いやこの四分の一の生存をこれ以外にないものとして受け入れ、激しい苦痛に苛まれている我が身を恥と思う気持ちさえなくしてしまっていた。人生は鉄の法則によって支配されているのだという以外に、自問に対する答えを見出すことはできなかった。母親がジョニーの看病で体力が衰弱し、病気になったとき、再び必死に祈ったが、まったく信じたりはしなかった。私の言葉は単なる言葉に過ぎなかった。母親は我々に何も言わずに、内蔵の病気を患っていたのだ。とうとう彼女はその痛みに耐えきれず、ヴィクトリア診療所に連れて行かれ、手術を受け、ジョニーの死後数か月して亡くなった。家族は強風に吹き飛ばされたかのようだった。残ったのはたったの四人だった。姉のエリザベスとクララ、それにジミーと私である。我々はみな大人になっていたので――私は十八歳だった――やがて自分自身の道をそれぞれ歩んでいった。